

# 青年期における死生観構築のための 教育実践についての一考察

山 本 詩 織

## Abstract

In this report, the outlook on the verge of death construction among the youth which was thought to be immaturity as a problem and the hypothesis that attitudes toward building process is not sufficient as a cause. The first is the actual feeling for the death of the self. The second is the opportunities to be aware of death. The third understanding to the loss by the death. I did an investigation of this hypothesis to in the death education. As a result, all the hypotheses were supported. A viewpoint to catch phenomenon itself called the death fundamentally is short, and the knowledge is few, too. Furthermore, an opportunity to be conscious about the death of the self decreases. It is easy to have an excessive negative image about death and this makes people consider death more as a taboo. This contributes to the inhibition that I think that a phenomenon called death is necessarily possible and accidental for the self. I provide the opportunity to consider our own death to prevent this.

キーワード……青年期 死生観 デス・エデュケーション 教育実践 喪失体験

## 1 はじめに

本稿は、死生観構築のために実施される教育実践において青年期に焦点を当て、考察するものである。現代教育用語辞典によると青年期は子どもから大人への過渡期にあたる12、13歳から21、22歳にかけての時期を指す<sup>1)</sup>。また、保育用語辞典によると青年期は必ずしも年齢だけで決められるものではなく、自我の確立を達成するための猶予期間と示されている<sup>2)</sup>。本稿における青年期はこれらに準じて、自我の発見や形成を行う時期である大体12、13歳から21、22歳を指す。青年期は死の概念が定着しており、人生の岐路に立つ時期である。その際に、「死」とりわけ「自己の死」について考察することは、自殺予防の観点だけではなく自己の人生を見つめ、そして自己実現を叶えるためには必要不可欠であると考えられる。

青年期の死生観構築に着目したものとしては、以下の先行研究が挙げられる。青年期における死生観の心理的発達について調査した丹下は、「死」に関する認知発達は年齢が発達の指標となりうるが、死生観構築については必ずしも年齢が発達の代替的指標とはなり得ないと示している<sup>3)</sup>。死別経験についても言及しており、これのみが死生観構築を促すのではなく、間接的な死の経験であっても死生観構築が可能であると述べた。丹下と同様に青年期の死生観に関す

る研究を行った赤澤・藤田も、死別体験が死生観のすべてを決定するようなものではないと結論づけている<sup>4)</sup>。

その上で丹下は、死生観構築に肯定的に作用するものは死についての思索活動だと指摘し、これは生に関する思索活動にも繋がることを推測している。看護学生に対して死生観構築実践を行いその結果を調査した園田・上原も丹下と同様に、実践で行った授業と実習により学生は「生」と「死」について考える機会を得て、そして学生の成長につながったと示唆した<sup>5)</sup>。

以上の結果から、青年期において「死」に関する考え方や生き方を学習し死生観を構築することは、青年期における発達に重要な影響を及ぼすことが分かる。丹下も「死」は老年期のみ重要な主題ではなく、青年期においても重要な主題となりうることを指摘している<sup>6)</sup>。

しかし青年期の現状において「死」の捉え方に問題が存在している。富松・稲谷の調査によると青年期においては「死」について考える機会が少なく、青年期にとって「死」は遠く未知の存在と捉えているという現状が明らかにされた<sup>7)</sup>。また、柿田・原・竹内は調査の結果、青年期における大学生は「生」に意欲的であり、「死」を意識することが少ないことを指摘し、その結果死を現実的に捉えることが困難な状況にあると述べている<sup>8)</sup>。

柿田・原・竹内の先行研究が示すように、大学生は「生」に意欲的なのだろうか。筆者は「死」を意識することでこそ「自己の生」の有限性を自覚し、限りある人生の充実を目指し思索し、行動することが可能となると考えている。死はその人生の終着点であり、この死を概観し意識化に置くということは自分が生命を喪失すると同時に何を喪失するのを見つめ直すことになる。言い換えるとこれは、自分が人生の中で何をきてきたのかを強烈に理解することである。

そもそも人間はその人生が存続する限り、何らかのコミュニティに属しており、その中で外的要因に触れ、思考体系や行動様式が変容し、生涯発達している。死を意識下に置くことによって、自己が変容してきたライフヒストリーやコミュニティによる他者との関係性、そして自己の立ち位置を自覚することに繋がる。自分の生き様を自覚することは自己の「生」を自覚することと同意であり、「死」を意識化するということは「生」をより自覚的に理解することだと考えることができる。自己の「生」について理解するこの過程は、自己の歩んできた道を捉えその後の人生について見通しを持ったかかわりを可能とする。つまり「死」を見つめるという作業は、自己の「生」を可視化し自己実現へとつなげていく作業なのである。

このことを裏付ける先行研究として、青年期における死の不安と「死」・「生」・「自己」の関係性を調査・分析した尾方・岡本の研究では、「生」や「自己」のイメージと「死」のイメージの関連性を明らかにしている<sup>9)</sup>。「死」を意識することと「生」への消極性は必ずしも一致せず、むしろ「死」を意識化することでこそ「生」が有限であり、より自己の問題として理解することに繋がる。

以上の見解から「死」を意識することが少ないと指摘されている時点で、それは「生」に意欲的であると評価することはできない。さらに、「死」を現実的に捉えることができない現状で

は、青年期における自己実現は不十分であるといえる。

この状況の原因は青年期における死生観構築の未熟さにあるのではないだろうか<sup>10)</sup>。死生観構築のために必要なプロセスについて、筆者は以下の3点を挙げる。1点目は青年期における「自己の死」に対して自覚し、理解することである。「死」とそれに至るまでの「生」に関する問題を自らの問題として意識し、自己の生命の有限性を理解した上で「死」の突然性や必然性について実感を持った理解をすることが必要である。

これに付随して、「死」という現象そのものを意識する機会を持つことを2点目とする。「自己の死」について、時間的にも距離的にも遠い存在であると楽観視せずに、深く考察し自己と向き合う機会が必要である。

3点目は「死」という現象による喪失への理解である。「死」によって剥奪されてしまうものについて予測をすることによって、自己が人生において何を得て、他者との関係性の中でどのように生きているのか、つまり生き様を理解することに繋がる。

本稿においては死生観構築に必要なこれらの3つのプロセス（以下上から順にプロセス1、プロセス2、プロセス3と表記する）すべてが現状において十分に果たされていないと仮説を立てた。

この仮説に基づき、筆者は日本にデス・エデュケーションを普及した第一人者であるA.デーケンの実践を基に、死生観構築を目的として専門学校生を対象にデス・エデュケーションを実施した。この実践を行うことで、先述したプロセスに対応することが可能である。まず、「死」そのものについて意識し考察する機会を確保することが可能となり、プロセス2に対応することができる。「死」について意識することによって、自己の死について省察し、自らの問題として認識していくことが可能となり、プロセス1に対応していくことができる。また、本実践においては「死」に関する知見を紹介し教授する過程も存在するため、「死」に対する理解や喪失に関する理解を促すことが可能となる。これはプロセス3に対応している。

本稿ではこの実践を分析し、筆者が立てた仮説と分析結果を比較しながら青年期の学生における「死」への意識の現状や問題点を明らかにすることを目的としている<sup>11)</sup>。

まず保育系専門学校A(以下A専門学校と表記する)におけるデス・エデュケーション実践について報告する。実践において学習者には自由記述の調査を実施した。その記述内容をKH-coderを使用<sup>12)</sup>し語句抽出することで分析し、上述した「死」への意識の現状や問題点を中心に考察していく。

## 2 実践概要と調査項目

本実践はA専門学校において「医療保育特講」という独自科目をデス・エデュケーション実践として開講・実施したものである。本稿におけるデス・エデュケーションは学習内容を「死」のみに限らず「生」をも包括した、より広義の学習であると解釈する。その上で、デス・エデ

ュケーションとは、学習者が「死」について学習する上で自己や他者の死について考察し、いつか迎えるであろう「死」するまでの人生の意義を探究し、自己実現を果たすことを目的とした教育であると定義する<sup>13)</sup>。

A 専門学校では保育士資格・幼稚園教諭二種免許状取得のために必要な科目を2年次までに履修し基礎を培い、3年次はより実践を意識した発展的な学習が可能となるようカリキュラム編成がされている。「医療保育特講」はその発展的な学習として位置付けられており、医療知識を用いた保育実践をする場合必要となる保育者としての倫理観や価値体系を構築することを目的として開講されている。本実践の対象者は保育系専門学校3年次生で「医療保育特講」を受講している男女34名(男性12名、女性22名)である。

本実践の授業目標としては以下の3点を授業概要(シラバス)に明記し、学生に配布し周知した。まず1点目として、自分自身の人生に対する考え方に気づく、という目標を挙げた。前述した定義に基づくと、デス・エデュケーションは学習者の人生の意義を探究し、自己実現を果たすことを目的としている。この目的を達成するためにはまず、自己の思考様式を自覚しなければならない。したがってこの目標は、デス・エデュケーションとしての目的を達成するためには必要不可欠であり、重要な位置づけに存在している。

次に2点目として、他者の考えを聞くことで違いに気づき、それを受け入れる、という目標を挙げた。自己は、他者との比較によってより明確に認識することが可能となる。さらに、この目標は学習者が「聞く」という側面だけではなく、他者に「話す」という側面をも持ち合わせている。自己の思考様式を他者に「話す」という行為によって、さらなる自覚を促すことが可能となる。したがってこの目標も1点目の目標と同様に、自己の思考様式を自覚するために存在している。

また、対象者となる学生は保育士養成課程に在籍している。保育士は子どもや保護者、地域住民や関係機関等、様々な人間とコミュニケーションをとる必要がある。そのため、コミュニケーション能力を求められる職種であり、その基本的なスキルアップをも視野に入れた目標となっている。

最後に3点目として、子どもに「いのち」を教える際の注意や配慮を考え、その方法を考えることができる、という目標を挙げた。この実践は、死生観の涵養により学習者自身の自己実現を促すという生涯学習的な意義のみを求めた実践ではない。子どもに保育者としてどのような援助が可能となるか、という専門職としての技術を獲得することをも視野に入れた実践である。そのためこの目標を設定した。

以上の目標を達成するために、表1の通り授業内容を計画し、実施した。計画に際して、A.デーケンによる上智大学、聖心女子大学、および上智大学コミュニティ・カレッジ（夜間の市民大学講座）における「死の哲学」の講義での実践<sup>14)</sup>を参考とした。デーケンの実践を参考とした理由は2点ある。まず1点目としては、デーケンの実践における学習者は青年期以降で

あり、本実践の学習者と同様であることが挙げられる。

2点目としては、デーケンが演習に重点を置いていることが挙げられる。デーケンの実践は演習を通して、当たり前前に存在している「生」と「死」について学習者が能動的に考察し、自己と対話を行うことが可能となっている。本実践の目標を達成するためには、自己の思考様式を自覚することが必要不可欠であり、そのためにデーケンが行った演習を第4回と第7回に実施している。

表1. 「医療保育特講」授業内容とねらい

回	授業内容	ねらい
1	オリエンテーション、事前アンケート記入	事前説明、予備調査
2	「死」ってどんなイメージ？	「死」に対する意識への自覚、多様な「死」のイメージの共有
3	「死」の種類	「死」に関する基本的知識の獲得
4	「自分自身の死」を考えてみよう①余命6か月と宣告されたら	自己や他者の「死」と向き合う
5	「自分自身の死」を考えてみよう②何を恐れるのか	「死」に対する自身の感情の自覚、「死」への恐怖に関する知識の獲得
6	「自分自身の死」を考えてみよう③何を失ってしまうのか	喪失体験の疑似体験、「生」への自覚
7	「自分自身の死」を考えてみよう④別れの手紙を書いてみよう	自己の「死」と向き合う
8	いのちについてどう思う？(妊娠、出産についてのディスカッション)	出生に関する基本的知識の獲得、他者との価値観の共有、自己の「生」への自覚
9	子どもに「死」をどう教える？①	発達段階における「死」の理解度について知識を獲得、援助者としての視点の獲得
10	子どもに「死」をどう教える？②	「死」と「生」に関する教育方法の考察
11	まとめ、感想記入	自己の省察

(執筆作成)

## 2-1 対象者

保育系専門学校3年次生で「医療保育特講」を受講している男女34名(男性12名、女性22名)。

## 2-2 期間

2015年9月から2016年1月にかけて授業時間内に実施した。

## 2-3 方法

毎授業開始時に質問紙を配布し、授業時間中に回答してもらい、授業終了時回収した。なお、質問紙配布毎に回答拒否ができることを対象者に明示した。

## 2-4 調査項目

本稿において分析する調査項目は以下の3点である。

### 1) 対象者の背景

第1回目授業時に、ペット等の死別体験の有無とその時期、身内や近い人の死別体験の有無とその時期、死のイメージについて記述してもらった。第1回目授業はオリエンテーションのみであり、本格的な知識の教授等はしていない。この時期にこの調査項目により調査することで、対象者の背景を把握することが可能である。また、対象者の立場としては自己を振り返るきっかけとなり、授業の導入として意識づけの効果がある。

### 2) 余命6か月と宣告された後の行動について

第4回目授業時に、もし自分が余命6か月であると宣告された場合、どのように行動するかについて理由も含めて考え記述してもらった。対象者はこの授業にて「自己の死」を明確にイメージすることを目標とする。「死」に際しての行動を問うことで、喪失に対する理解度を把握することが可能である。そしてそこから、対象者がどの程度明確な「自己の死」をイメージしているのか明らかにする。また、この調査によって対象者が調査段階で人生において重要視している事柄を分析することが可能となる。

### 3) 死ぬ恐怖

第5回目授業時に、「自己の死」に際して何に恐怖を抱くと思うか考え記述してもらった。複数恐怖を抱く場合、そのすべてを回答してもらっている。この調査項目から対象者の死に対する恐怖をリストアップし、先行研究によって明らかとされている死への恐怖と比較する。

## 2-5 分析方法

本稿においては樋口耕一が作製・公開している KH Coder を用いて調査項目のテキストを読み込み自動的に語を抽出する。このシステムを使用することによって客観性を確保した分析が可能となる。語を抽出した中から頻出語を確認した上で、それらの語句が文脈の中でどのような共起関係にあるのか明らかにすべく、KH Coder の「共起ネットワーク」コマンドを使用し、出現パターンの似ている語を線で結んだネットワークを描く。この図において、強い共起関係を示すものほど語を結ぶ線が太くなり、出現数の多い語ほど大きい円で描画される。そこから

記述の特徴を分析していく。なお、分析に際しては KH Coder の KWIC コンコーダンスのコマンドを使用し、それぞれの語句が文脈でどのように使用されているのか確認している。

## 2-6 倫理的配慮

学生には授業開始日のオリエンテーションにて、授業と研究の趣旨を説明し、協力を求めた。質問紙にて回答した情報は個人が特定されないこと、回答は強制ではないこと、学業成績とは無関係であること、研究成果として学会での発表や誌上投稿があることを説明し、了承を得た。

## 3 結果と分析

### 3-1 回収率

前提として、本稿においては欠損データ（回答拒否・未記入者）も死に対して思索することの拒否がその理由として考えられるため、有効回答者に含んでいる。さらに回答は全て複数回答を全て含んだものを分析している。

- 1) 対象者の背景についての事前アンケートは実習に関する欠席等により 26 名分（76%）回収した。
- 2) 余命 6 か月と宣告された後の行動については 33 名分（97%）回収した。
- 3) 死ぬ恐怖については 32 名分（94%）回収した。

### 3-2 対象者の背景

26 名分の事前アンケートでは、ペット等の人間以外との死別体験について、21 名（81%）が経験していると回答した。身内や近い人との死別体験については、24 名（92%）が経験していると回答した。その内、どちらも経験していると答えた割合は 19 名（73%）に上り、全く経験がないと回答した者はいなかった。

体験の時期について問う<sup>15)</sup>と、人間以外との死別体験は幼児期に 2 名、小学生時に 11 名、中学生時に 1 名、高校生時に 2 名、専門学生時に 1 名と回答があり、幼児期から小学生時に回答が集中した。対して身内や近い人との死別体験は幼児期に 2 名、小学生時に 8 名、中学生時に 6 名、高校生時に 8 名、専門学生時に 10 名という回答だった。身内や近い人との死別体験は専門学生時に経験したという回答が多く、ごく最近経験したという回答もあった。対象者が年齢を重ねると同時に周囲の人間も同様に年齢を重ねている。祖父母等の年齢も高齢となっていることが予想されるため、年齢を重ねる度に死別体験をする機会が増加する可能性も増えるのではないだろうか。

次に、「あなたは「死」について、どのようなイメージを持っていますか？」という問いに対して対象者から得られた自由記述データを分析した。分析の手順として、まずは KH Coder を

用いて前処理を実行し、文章の単純集計を行った。その結果、48の段落、79の文が確認された。この中で分析対象ファイルに含まれているすべての語の延べ数である総抽出語数は234、何種類かの語が含まれていたのかを示す数である異なり語数は118であった。さらに助詞や助動詞など、どのような文章にでも出現する一般的な語が除外され、分析に使用される語としては122語が抽出された。これらの頻出語の内、頻度2以上の語である15語を表2に示す。

表2. 「死のイメージ」についての自由記述における頻出語

順位	語	頻度	順位	語	頻度	順位	語	頻度
1	怖い	9	6	自分	3	11	悲しい	2
2	死ぬ	5	7	起きる	2	12	悲しむ	2
3	イメージ	4	8	周り	2	13	分かる	2
4	人	4	9	大変	2	14	別	2
5	暗い	3	10	痛い	2	15	別れ	2

(KH Coder により執筆者作成)

次に KH Coder の「共起ネットワーク」コマンドを使用して共起の程度が強い語を線で結びネットワークを描いたものを図1として示す。「怖い」という語を中心にまとまりが1つ、そして右下に小さなまとまりが1つ確認できる。ここから「死のイメージ」について5つの特徴的なパターンを見出すことができる。

まず1点目として「死」が未知の現象であることに起因した恐怖を想起するというパターンである。これは図1における①のまとまりが表している。対象者の記述を振り返ると、「死んだことが 分かるのか 分からないから 怖い」や「自分でいられない、自分を感じられないから 怖い」等の記述がなされている。「自己の死」は人生に一度きり経験するものであり、その経験談を他者から伝え聞くことは不可能である。そのため想像の範疇を超えることのない未知の現象として恐怖の対象となっていることが分析できる。

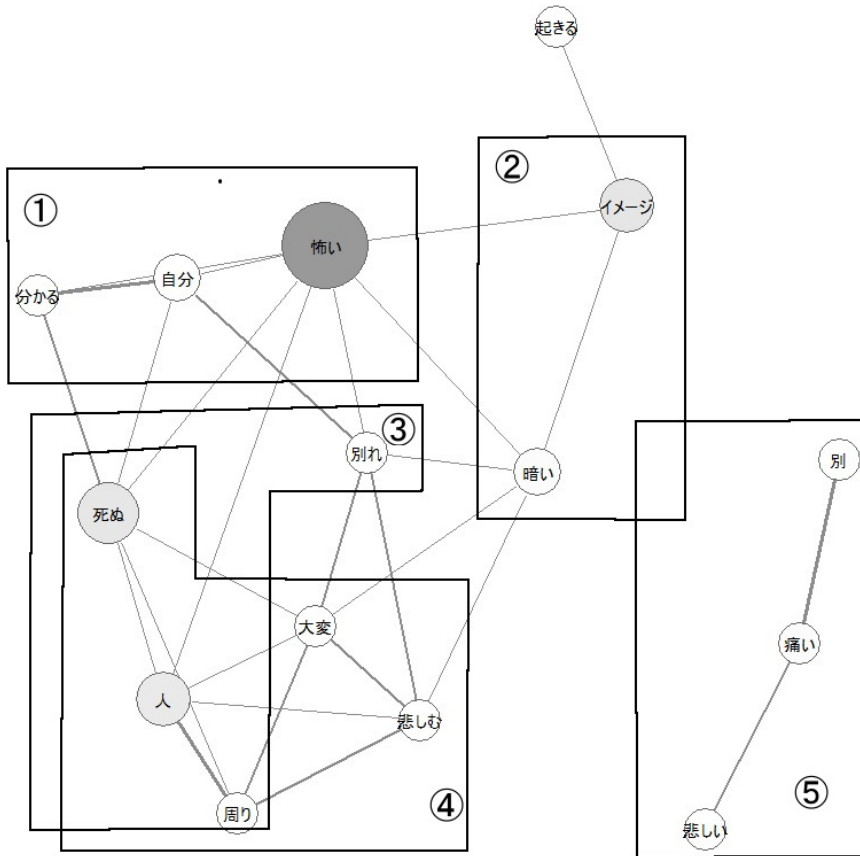
2点目としては、漠然としたマイナスのイメージを想起するパターンである。これは図1における②のまとまりが表している。対象者の記述を振り返ると、「怖いイメージ」や「暗い、冷たい イメージ」等の記述がなされている。これは1点目とは違い、「死」という現象や言葉、概念そのものをマイナスのイメージと関連付けていると考えられる。

3点目としては、他者との別れを想起するというパターンである。これは図1の③が表している。対象者の記述を振り返ると、「もうみんなとは お別れなんだ」や「別れ」という記述がなされている。この特徴は、青年期において「死」は他者との関係性の中で想起されていることを反映している。これは自己の生を他者との関係性の中で感じていることの逆説的な説明と



なるのではないか。したがって青年期における他者との関係性は重要度の高いものであることが推測できる。

図1. 「死のイメージ」についての自由記述における共起ネットワーク



(KH Coder により執筆者作成)

4点目は他者への影響に注目しているというパターンである。これは図1の④のまとまりが表している。他者との繋がりに注目している点では3点目と類似性が見られるが、こちらは「自己の死」による他者への影響について言及した記述である。「死ぬ人よりもその周りの人が大変」や「周りや近くにいる人が悲しむ」等、負の影響に注目した記述がなされている。この特徴からも青年期における他者との関係性の重要度の高さがうかがえる。このイメージは対象者が事前に死別体験をした際に感じた感情が影響を与えている可能性がある。他者の「死」によって自己が受けた影響を思い出し、「自己の死」の場合も同様の状況になると予想し、発生したイメージだと考えられる。

5 点目としては図 1 の⑤が示す、苦痛に関するイメージを想起するパターンである。漠然とした肉体的痛みを想起させる「痛い」という記述や漠然とした「痛みや苦しみ」という記述がなされている。これは死が自己の意思とは反して発生してしまう現象だと強く意識していると解釈することができる。

### 3-3 「自己の死」に対する意識

次に「あなたは身体の不調を感じ、病院を受診しました。すると精密検査をすることになり、そこから不治の病だと診断されました。余命はあと 6 か月とのことです。それを聞いてあなたは、残りの 6 か月はどのように過ごしますか？」という問いに対して対象者から得られた自由記述データを分析した。先の分析と同様に、まずは KH Coder を用いて前処理を実行し、文章の単純集計を行った。その結果、126 の段落、202 の文が確認された。この中で分析対象ファイルに含まれているすべての語の延べ数である総抽出語数は 1847、何種類の語が含まれていたのかを示す数である異なり語数は 415 であった。さらに助詞や助動詞など、どのような文章にでも出現する一般的な語が除外され、分析に使用される語としては 814 語が抽出された。これらの頻出語の内、上位 15 語を表 3 に示す。

出現回数が 1 回だけの語が多く、KWIC コンコーダンスコマンドにて文脈を確認したところ、「友人」と「友だち」等の同じ意味合いで使用されている語が多数存在した。より共起関係を探るために、KJ 法によりコーディングをした結果、抽出語は表 4 のように 17 に分類できた。これを基に KH Coder の「共起ネットワーク」コマンドを使用して共起の程度が強い語を線で結びネットワークを描いたものを図 2 として示す。この図 2 から、余命宣告をされた場合に対する行動パターンを 3 つに分類することができる。

表 3. 「余命宣告をされた場合の行動」についての自由記述における頻出語

順位	語	頻度	順位	語	頻度	順位	語	頻度
1	行く	28	6	好き	14	11	友だち	10
2	人	27	7	書く	12	12	旅行	10
3	家族	23	8	月	11	13	考える	9
4	会う	21	9	伝える	11	14	思う	8
5	過ごす	18	10	食べる	10	15	自分	8

(KH Coder により執筆者作成)

表4. 「余命宣告をされた場合の行動」についての自由記述をコーディングした場合の頻出語

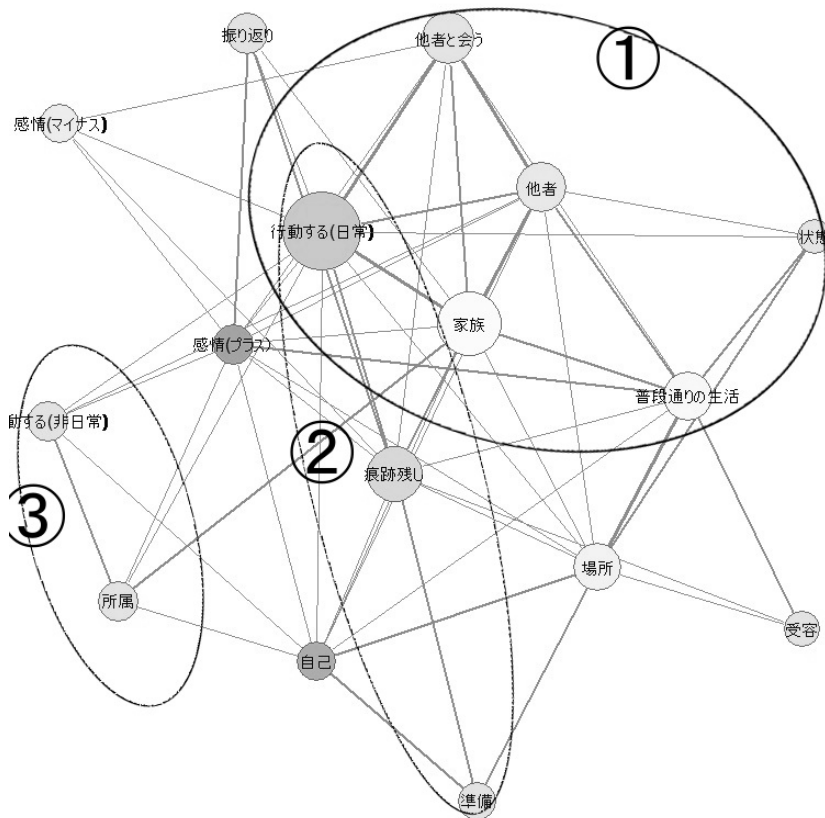
コーディング名	語	頻度
行動する(日常)	行く、遊ぶ、食べる、飲む、見る、話す、帰る、言える、作る、実行、書ける、買う、描く、料理	56
家族	親戚、母、兄、祖母、祖父、妹、姉、弟、父、家族、親、子ども、妻	39
痕跡残し	手紙、日記、ビデオメッセージ、書く、思い出、写真、ムービー、残す	28
他者と会う	会う、言ってみる、伝える、挨拶、感謝、関係、恩返し	25
他者	友だち、友達、友人、大切な人、親しい人、縁があった人、世話になった人、知り合った人、恋人、かかわった人、好きな人、アーティスト、バンド、会えなかった人、久しぶりの友だち	22
普段通りの生活	いつも通り、普段通り、普段、いつも、普通通り、普通、過ごす、維持	20
場所	ディズニー、TDL、USJ、温泉、家、部屋、国内、場所、海外、外国	19
振り返り	振り返る、思い出す、考える	11
行動する(非日常)	旅行する、遠出、挑戦、やりたいこと、ライブ、好きなこと、使う、ヒッチハイク、辞める	10
感情(プラス)	楽しい、楽しむ、落ち着く	10
所属	学校、アルバイト、バイト、仕事	10
感情(マイナス)	後悔、無理、悔い、恐れる、苦しい、嫌	8
自己	自分	8
準備	エンディングノート、遺言書、掃除、遺影、整理、遺書	7
受容	受け入れる、受け止める、運命、迎える	5
状態	働ける、動く	3
その他	その他分類不可能な語	48

(KH Coder により執筆著作成)

まず1点目として家族や他者と日常的な行動を共にするというパターンである。これは図2における①の部分で確認できる。「家族や友人と過ごす」や「家族、恋人と思いっきり笑う」、「母と祖母の手料理を毎日食べる」等の記述がなされている。この行動の中でもさらに2点特徴を見出すことが可能である。1つはその日常に普遍性を求めているという点である。記述には「友達とは、いつものように楽しく過ごしたいと思う」というようにあり、家族や他者との関係性に変化を求めず、普遍的な状況を過ごしたいという希望が読み取れる。また、ここから死に対する受容に関しての記述と共起関係が認められている。もう1つは他者に会うという行動を特に求めている点である。「縁があった人たちに会いに行く」や「大切な人、

感謝してる人たちに会いに行く」等の記述が確認できた。

図2. 「余命宣告をされた場合の行動」についての自由記述をコーディングした場合の共起ネットワーク



(KH Coderにて執筆者作成)

事前アンケートにて青年期は「死」を考える際に他者との関係性を重要視していることが明らかにされた。このパターンにおいても同様に他者との繋がりを重要視していることが読み取れる。自己と他者が関わる中に「生」を見出していることに起因していると筆者は考える。これは青年期における「生」は他者との関係に密接な共起関係を示していることを示唆している。

また、日常と何ら変わらない普遍的な生活を望んでいる。これは日常から「死」を切り離して捉えていることを反映しているのではないかと推測できる。「死」を非日常的な存在と捉えているからこそ、より日常と何ら変わらない普遍的な生活を希求してしまうと推測できる。「生」を希望することは人間の生存本能から当然の思考形態である。しかし「死」は非日常に存在するのではなく日常に存在している。この部分において「死」に対する理解が不足しているといえよう。また、

強く日常的な生活を希求しすぎてしまう場合、「死」によって引き起こされる喪失体験により強いショックを受けてしまう可能性を指摘できる。

2点目は何かしら自分の痕跡を残すために行動をするというパターンである。図2における②に確認できる。記述においては「手紙を書きます。何かを残したいです」や「家族とできるだけ多くの思い出作りをする」、「いろんな人とたくさん写真を撮る」等の記述があり、痕跡を残す形は手紙や映像、写真、日記という具体的な形が表現されていた。この痕跡を残すための行動は死に対する準備活動との共起が見られる。「遺影の写真を撮る」や「大切な人に遺書を書く」という記述が存在しており、このように自己の痕跡を残すことは他者に対しての死への準備活動も伴っていることが分かる。

このパターンも他者との密接な関係を読み取ることができる。痕跡を残すのは他者に対してである。つまりこれは自己が「死」によって消滅した場合であっても他者との関係の継続を望むために引き起こされる行動と解釈することができる。さらに、他者との関係性の中で「自己の死」を受容しようとしていると分析することができる。

3点目は現在の所属を抜けるというパターンである。図2における③に確認できる。記述を振り返ると「仕事をしていたら辞めて、学校に行っていたら学校も辞める、アルバイトも辞める」や「仕事を辞める」という記述が確認できた。この記述に共起関係があるものとして非日常的な行動や家族とのかかわりがあった。

1点目の行動と相反して、非日常的な行動についての記述がこの3点目の行動パターンである。非日常的な行動を取るためには日常生活では難しく、したがってその日常生活から離れるために所属を抜けるという選択をする。これは脱社会を意味しているのではないだろうか。

### 3-4 死ぬ恐怖と喪失に対する理解

最後に「自分が「死ぬ」場合、何が怖いですか？」という問いに対して対象者から得られた自由記述データを分析した。先の分析と同様に、まずはKH Coderを用いて前処理を実行し、文章の単純集計を行った。その結果、90の段落、195の文が確認された。この中で分析対象ファイルに含まれているすべての語の延べ数である総抽出語数は553、何種類の語が含まれていたのかを示す数である異なり語数は147であった。さらに助詞や助動詞など、どのような文章にでも出現する一般的な語が除外され、分析に使用される語としては280語が抽出された。これらの頻出語の内、上位15語を表5に示す。

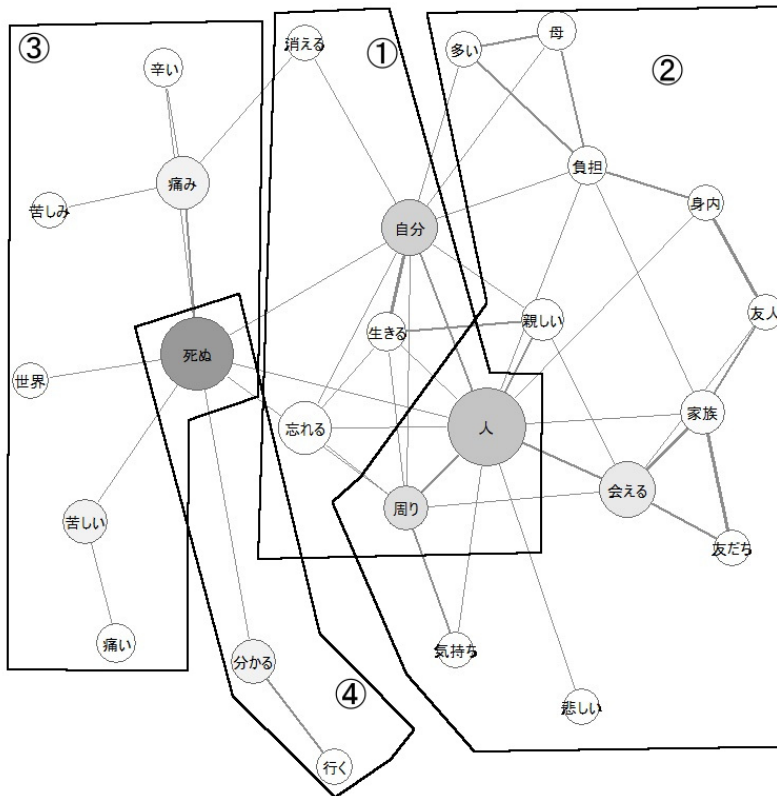
次にKH Coderの「共起ネットワーク」コマンドを使用して共起の程度が強い語を線で結びネットワークを描いたものを図として示す。この図4からは死に対する恐怖のイメージにおける4つの特徴を見出すことが可能である。

表 5. 「死ぬ恐怖」についての自由記述における頻出語

順位	語	頻度	順位	語	頻度	順位	語	頻度
1	人	17	6	忘れる	8	11	親しい	4
2	死ぬ	15	7	家族	5	12	殺す	3
3	会える	9	8	苦しい	5	13	辛い	3
4	自分	9	9	周り	5	14	生きる	3
5	痛み	8	10	分かる	5	15	痛い	3

(KH Coder にて執筆者作成)

図 3. 「死ぬ恐怖」についての自由記述における共起ネットワーク



(KH Coder にて執筆者作成)

まず 1 点目として自己の存在が消滅することに対する恐怖が想起されている点である。これは図 3 の①に表れており、さらに 2 つに分類することができた。1 つ目は自己として存続できないことに対する恐怖である。対象者の記述を振り返ると、「自分の存在がなくなる」や「自

分」としてもう一度「生きれない」等の記述が確認できる。2つ目は自己の存在を忘却されることに対する恐怖である。これに関しては「自分が世間の人に忘れられてしまうこと」や、漠然と「忘れられること」等の記述があった。この忘却に対する恐怖は他者の存在を前提として考えているからこそ生じるものである。つまりこの2つ目の恐怖は他者との関係性と自己の存在の共起関係から発生していると推測できる。

他者との関係性という視点から、2点目として他者との別れに対する恐怖を想起するという特徴もある。これは図3の②において全体的に示されている。「家族に会えない」や「家族、友人などに会えない」等の記述があった。この特徴からは、やはり前述してきたように他者との関係性について対象者が重要視していることを読み取ることができる。

3点目としては苦痛に対する恐怖が特徴として挙げられる。これは図3の③に示されている。振り返ると「死ぬ前の痛みや辛さ」や「痛みのある死に方」、「苦しい死に方」等の記述が確認できる。この記述における「痛み」や「苦しみ」は肉体的なものを想像することができる。しかし、肉体的な苦痛については想像することができていたとしても、死が迫った中でのうつ状態や怒り、孤独感を味わう等の精神的な苦痛や仕事上の問題や経済的な問題を抱える等の社会的な苦痛について明確に言及する記述は見られなかった。肉体的な苦痛は日常生活において感じることもあるために想像しやすい。しかし、「死」を控えている場合、肉体的な苦痛のみならず、上記のような精神的な苦痛や社会的な苦痛を感じることも予測できる。青年期においてこの精神的な苦痛や社会的な苦痛は自覚的にイメージすることが困難なものであると解釈することができる。

最後に4点目として死の未知さによる恐怖が挙げられる。これは図3の④に存在を確認できる。記述を振り返ると、「どうなるか分からないからこわい」や「どこに行くのか分からない」等の記述がある。「死」について完全な理解をすることは不可能である。したがってこの恐怖が消失することはありえない。しかし、この恐怖が存在し未来を予知することができないからこそ、現状をより豊かにすることができるよう思索することが可能となると筆者は考える。

## 4 考察

### 4-1 対象者の背景と死に対するイメージから見える対象者の現状

調査項目1)の分析結果を概観すると、全体的に「死」を負のイメージとして捉えていることが分かる。このイメージを持つことは人間の生存本能や自己保存本能から自然発生的な現象といえよう。しかし、このイメージが増幅することで死に対する過度な恐怖や拒絶を引き起こす可能性があるのではないだろうか。

さらに、対象者は「死」が他者に与える影響について負の側面のみを捉えている。しかし「死」は本当に負の影響のみをもたらす現象なのだろうか。他者の「死」によって「自己の生」をよ

り実感し、「死」についての思索を深めることは、決して負の影響のみだとは言いきれない。人間には必ず「死」が訪れるという死の必然性や突然性を自覚することは、人間における「死」や「生」のより実感的な理解に繋がっている。また、自己にも「死」が訪れるということ意識し「死」が訪れるまでの「生」について思索を深めることは、自己と向き合うこととなる。

対象者は他者の「死」から得られる思索について予測することができていない。これは何らかの形で死別経験をしているにも関わらず、対象者がその経験から自己と向き合い「死」の意味について省察し思索を深めるといふ経験をしていないことに起因するのではないか。つまり、死別経験はあるものの、その他者の「死」が何を意味しているのか考察する機会が不足している。他者の「死」によって、対象者は他者との関係性に気づくことができる。他者との関係性の中で生き、それぞれが影響を与えつつ「自己の生」が成り立っていることに気づき、また、その関係性がなくなるとも外的要因となって自身に何らかの影響を及ぼす。他者の「死」からこれに気づくことによって自身の生き様を見つめ直し、そして「自己の生」を自覚することに繋がる。このように他者の「死」は必ずしも「負」の影響のみを与えるものではなく、さらなる自己実現に向けた思索に繋がる。

しかし本実践の分析からは「死」について「負」のイメージのみが強調されて抽出されている。この状況が進行してしまうと、より「死」について意識し考察する機会が剥奪されることが危惧される。これが原因となり、「死」を意識する機会が不足してしまっていると考えられる。したがって先に挙げたプロセス1と2は現状から十分であるとは評価できない。

#### 4-2 余命宣告後の行動から見える「自己の死」に対する認識不足と喪失への理解

調査項目2)の分析結果における特徴を概観すると、「死」によって引き起こされる喪失について明確なビジョンを持つことが出来ておらず、「自己の死」に対して自覚的になれていない現状を指摘することができる。これはプロセス1として挙げた「自己の死」に対する実感のなさを表している。

また、プロセス3として挙げた「死」によって引き起こされる喪失への理解についても現状から不足していることを指摘することができる。喪失について理解するためには必然的に「死」という現象についての理解が必要となる。この現状のままでは「死」に直面した場合に自己の想像をはるかに上回る喪失体験をしてしまい、必要以上の悲嘆症状を引き起こしてしまう可能性がある。また、他者との関わりを望む一方で脱社会を希望しており、矛盾が生じてしまっている。これは感情のねじれが生じる恐れを含んでおり、さらなる混乱を招く危険性がある。

#### 4-3 死の恐怖から見える死に関する理解

調査項目3)の分析結果を概観すると、「自己の死」に対する実感が持てていないことを指摘ことができ、この結果からプロセス1が十分ではないことを指摘することができる。「自己



の死」に対する予測が限定的なため、それに伴いイメージする恐怖も限定的になってしまっている。A.デーケンには死に対する恐怖や不安について分析をし、9つのタイプを提示している<sup>16)</sup>。しかし本実践における特徴は4つであり、デーケンが提示した9つとは異なる。特に尊厳を失うことについての恐れや、人生を不完全なままに終えることへの不安についての記述が本実践においては見られなかった。

この結果は以下の2点を示唆している。まず1点目は「死」によって引き起こされる喪失に対する理解が不足しているという点である。調査項目2)においても言及したが、対象者は「死」を迎えるまで日常的な生活を送ることが可能だと予測する傾向が見られた。この傾向は、例えば疾病によって「死」を迎える場合、身体的な自由がきかず、社会的な地位も失う可能性がある。自身がそのような姿を他者に見せる可能性がある、ということを対象者は予測できていないのではないだろうか。

次に2点目として、自身の将来について見通しを持ち考えることができていない現状を表している。「死」によってその「生」は終了してしまう。「生」というものは常に充実を求めているものであり、より自己が満足できる「生」を求めライフワーク等を設定していく。そのため、自身の設定したライフワークやライフプランが達成できずに「死」を迎えることを恐れ、不安を感じる。しかし本実践における対象者にはこの視点が欠如している。これは、そもそも自身のライフデザインが出来ていないことに起因するのではないだろうか。ライフデザインをする、ということは自身の将来を見通すことである。この見通しを持っていない現状において、対象者がより自己充実を目指すことは困難であると筆者は考える。

## 5 おわりに

本稿では、死生観構築のために以下のプロセスを設定した。1つ目は「自己の死」に対する実感、2つ目は「死」を意識する機会の充実、3つ目は「死」による喪失への理解である。これらのプロセスを経て死生観構築がなされるとし、現状ではこのプロセスを十分に経ていないがために青年期における死生観構築が不十分であると仮説を立てた。この仮説について検証するために、保育系専門学校Aにて筆者が実践したデス・エデュケーションにおいて調査項目を設定し、自由記述回答をしてもらった。この自由記述についてKH Coderを使用し頻出語の抽出や共起関係から特徴を分析した。その結果、プロセス1から3はすべて十分に経られていないことが支持され、仮説によって死生観構築が未熟だと考えるに妥当と結論づけることができる。

根本的に「死」という現象そのものを捉える視点が不足しており、知識も不足している。実践においてはまず、この知識の教授を実施し知識の充填を図る必要がある。このことに付随して、「自己の死」について意識する機会が減少している。「死」に対して過度な負のイメージを抱きやすく、そのことからより「死」について考察することをタブー化してしまう。それは自己に対しても「死」という現象が必然的かつ突発的に起こりうるものだと考えることを阻害し

てしまう。これを防ぐために「自己の死」について考察する機会を提供することが望まれる。

また、青年期は他者との関係性において「生」と「死」を考える特徴が顕著に見られた。したがって、青年期を対象としたデス・エデュケーションを実施する際にはこの点に考慮した内容を設定する必要がある。

今後はこのデス・エデュケーションを一般化するため、より実践内容の精緻化を図り実践の効果測定の方法について検討していく必要があるだろう。

## <注>

- 1) 中谷彪、浪本勝年（2003）『現代教育用語辞典』、北樹出版、p.144
- 2) 森上史朗、柏女霊峰（2015）『保育用語辞典』、ミネルヴァ書房、p.283
- 3) 丹下千佳子（1995）「死生観の展開」、名古屋大学、『名古屋大学教育学部紀要、教育心理学科』42、p.154
- 4) 赤澤正人、藤田綾子（2007）、「青年期の死生観に関する研究」、日本教育心理学会、『日本教育心理学会総会発表論文集』49、p.338
- 5) 園田麻利子、上原充世（2012）「看護学生の「生と死」に対する考え方の推移」、『鹿児島純心女子大学看護栄養学部紀要』16、pp.13-20
- 6) 丹下智香子（1999）「青年期における死に対する態度尺度の構成および妥当性・信頼性の検討」、心理学研究、『心理学研究』70（4）、p.328
- 7) 富松梨花子、稲谷ふみ枝（2012）「死生観の世代間研究」、久留米大学大学院心理学研究科、『久留米大学心理学研究』11、p.52
- 8) 柿田明梨、原幸一、竹内健児（2008）「現代青年の抱く死生観の構造—死に関するエピソード作成の試みを通して—」、徳島大学総合科学部、『人間科学研究』16、pp.119-120
- 9) 尾方綾、岡本祐子、（2012）「青年期における死の不安と「死」・「生」・「自己」のイメージ」、広島大学大学院教育学研究科心理学講座、『広島大学心理学研究』12、pp.137-154
- 10) その他の要因として少年期における死生観構築のための教育に問題があることも指摘できるが、本稿では言及せずにのちの検討課題として挙げる。
- 11) 本実践に対する評価や分析を実施する必要があるが、本稿では死生観構築における形成要因について着目するため、それらについては課題として後に詳細を分析し、検討する。
- 12) 樋口耕一（2004）「テキスト型データの計量的分析—2つのアプローチの逡巡と統合」、『理論と方法』19（1）、pp.101-115
- 13) 山本詩織（2015）「A.デーケンによる死への準備教育に関する生涯学習的研究」、新潟大学大学院現代社会文化研究科、『現代社会文化研究』61、p.105
- 14) A.デーケン（1986）「死への準備教育の意義—生涯教育として捉える」、A.デーケン編、『死への準備教育 第一巻 死を教える』、メヂカルフレンド社、p.7
- 15) 複数回答有の結果を示している
- 16) A.デーケン（2001）『生と死の教育』、岩波書店、pp.19-23

主指導教員（相庭和彦教授）、副指導教員（雲尾周准教授・篠田邦彦教授）